

prologue

「総合系」の発展を期して

三木賢治*

MIKI Kenji

文系の大学にとっては肩身の狭い日々が続く。それでなくても“リケジョ（理系女子）”の活躍が評判になっている折も折、新たに小保方晴子さんがSTAP細胞の作成で世界を驚かせたのだから、理系大学の人気は高まる一方だろう。二者択一だから理系が浮かべば、文系は沈む。

振り返れば、宇宙飛行士の向井千秋さん、山崎直子さんの活躍などが理系を勢いづかせてきた大きな要因だろうか。もちろん山中伸弥さんのノーベル賞受賞をはじめ理系男子の業績も輝かしい。理系にプラスとなったかどうかは疑問だが、理系の首相も出た。

それにひきかえ文系は旗色がよくない。昔から「つぶしが利く」と評判をとってきた法学部は一部大学を除いて地盤沈下が指摘されている。とくに大学院は法科大学院に押され気味で、その法科大学院も最近は淘汰が始まり、つぶしが利くどころか、つぶしに遭わぬように血眼になっている。活字離れの世相も、文献主義が幅を利かせる文系にとっては頭痛の種だ。おまけに、卒業後の平均年収で理系に大きく水をあけられている実態が、各種の調査で浮かび上がっている。このままでは文系大学に入学することだけで“負け組”

* 東北文化学園大学総合政策学部学部長

のレッテルを貼られかねない。本学部は「総合系」とは言え、文系の講座が多いだけに、文系への評価は気がかりではある。

文系、理系の区別は大正年間の高등학교令で旧制高校を文科、理科に分けたのがはじまりのようだから、かれこれ100年の歴史を有していることになる。学術が目覚ましい進歩を遂げ、世の中は複雑になる一方なのに、単純な二分法が陳腐化しないのは不思議ではないか。時代は領域を超えた総合的な知見や判断を求めており、実業界などではとっくに融合が図られているのに、最先端に行くべきアカデミズムの世界は伝統や既得権にしばられ、価値観を転換できずにあえいでいるように映る。

状況打開の鍵を握るのは、本学部をはじめとする「総合系」の役割だと思う。従来の学部や専攻の枠組みを超越し、部際的な領域に踏み込んで、新たな学問領域の地平を開いてきた。「総合系」が幅広い支持を集め、社会に根を拡げた時、アカデミズムの世界は二者択一の呪縛から解かれ、時代のニーズにかなった学問体系を構築できるのではないか。

本書も「総合系」の発展を期し、先鋭的な研究成果を盛り込んだつもりだ。読者諸賢のご講評、ご叱責を賜れば幸甚である。